

人物

みのかも

10 小原佐忠治

「美濃加茂事件」の指導者

時代はまさに激動期であった。自由民権運動が全国的に高まる。加茂地方においても愛国交親社員による「美濃加茂事件」がぼつ発した。その中心人物として世に出たのが、当時四十三才の男ざかりになっていった小原佐忠治である。

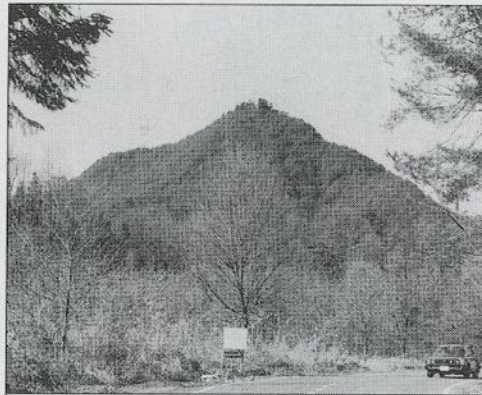
佐忠治は天保十一年（一八四〇）

加茂郡木野村に生まれ、中蜂屋村の諸田の小原家に養子となる。人並以上の立派な体格を持ち、統率力があつた。又、生来の世話好きで、自分を頼って来る者がいれば一肌も二肌も脱ぐという俠氣の持ち主であつた。当時、加茂地方の農民は塗炭の苦しみにあえいでいた。干害に加え、増税と米価の暴落によって、自作農民は納税のために土地を売って小作農に転落していった。家財道具も売り渡しかゆをすすって飢えをしのぐ者がある一方、大地主はますます所有地を広げていった。

「美濃加茂事件」はこうした背景の中、起こされる。愛国交親社は明治十三年、名古屋で結成された自由民権の結社で、佐忠治は加茂地方のリーダーであつた。会員

の中には下層農民、人力車夫、日雇い労働者など、その日暮らしの人々が多く含まれていた。事件は愛国交親社の社長（庄林一正）が官憲に捕えられる事から起きる。

佐忠治は名古屋の本部に対し蜂起するよう要請したが、本部の反応



拠点となった山之上富士

略歴→天保11年（1840）生まれる。明治17年、44才の時減税と徴兵令廃止を目的として「美濃加茂事件」を指導する。貧しい農民と共に実力で官憲に訴えたこの事件は山之上村富士山を拠点に行われるが、警官隊に鎮圧された。出獄後の明治40年没。享年68才。

竹鎗を持った農民たちの大群によって埋め尽くされた。人数は見ると見るうちにふくれ上がり、その数三百五十とも四百五十ともいわれた。そして、山之上村の富士山に本部を置き、野地原と伊深天王社の二カ所に支部を定め、弾薬を用意して炊き出しをして待機した。

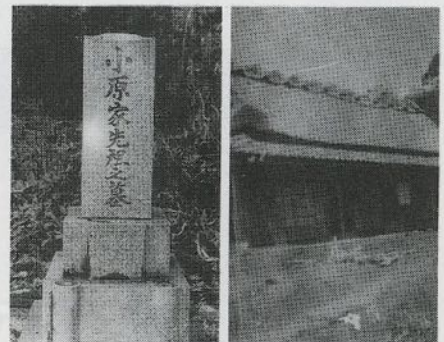
当時の記録によれば、指揮者らしい一人は戸長の前に進み出て、腰にさした刀を膝のそばにおいて一礼したあと、弁舌さわやかに蜂

は批判的であつた。ここに、佐忠治は独力をもつてでも行動を起こそうと決意し、「美濃加茂事件」が起きる。時に明治十七年七月のことである。

蜂起のスローガンは「減税」と「徴兵令廃止」。加茂郡の川浦・伊深・加治田・山之上などの村の街道は、早朝から手に手に鎌や刀、

起の趣旨を述べ、要求は必ず実現する覚悟であるから、直ちに県庁に取りついでほしい、と厳然たる態度で訴えたという。この人物は誰だかわからないが、堂々たる風采、理路整然とした弁舌ぶり、あたかも小原佐忠治のような印象を与える。

警官隊はすぐさま出動して蜂起



佐忠治の墓

佐忠治の生家

部隊の鎮圧にあつた。乱闘数刻に終結し、防塁を築いてたてこもつた。対陣すること三日間、部隊の一部は警官隊に囲われて捕われ残りの大部分は裏山づたいに逃走して、事件はここに終末を告げた。

佐忠治は中山道を落ちのびたが埼玉県浦和で捕えられてしまった。翌十八年、重刑十年の判決を受け入獄した。数年後、恩赦に浴して出獄したが、彼を見るかつての同志の目は冷たかつた。

晩年の佐忠治は蜂屋小学校前で文房具屋を営み、ひっそりと余生を送つた。明治四十年十一月二十九日、六十八才で彼は生涯を終えた。

※ この事件は当時「東濃暴動」といわれ、のち「加茂事件」または「美濃加茂事件」といわれるようになった。